

館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 10 月 2 日 (木)

発行 館長 加藤 智 一

金木犀の香りに寄せて——秋を告げる橙の記憶



山形の空気が澄み渡り、朝晩の冷え込みに秋の気配を感じ始める頃、ふとした瞬間に鼻腔をくすぐる甘い香り。今年もそんな季節がやってまいりました。本日早朝、通い慣れた霞城の森でのこと。今年の初金木犀でございます。金木犀はモクセイ科モクセイ属の常緑樹で、中国南部を原産とします。日本には江戸時代に渡来したとされ、特に関東以南の温暖な地域で広く植栽されております。山形のような寒冷地でも、学校や公園の庭木として、見かけることが多くなりました。この花の最大の特徴は、なんといってもその芳香でしょう。金木犀の香りは、リナロール、ゲラニオール、 α -イオノンなどの芳香成分によって構成されており、フローラルでフルーティーな甘さがあります。香水や芳香剤にも使われるが、天然の香りは人工物とは一線を画します。以前高校に勤務していた頃、課題研究で、金木犀の香りを抽出してみたいという生徒がいて、彼女はラベンダーの精油を抽出するのに一般的な水蒸気蒸留法で挑戦していましたが、何度試してもうまくいきませんでした。それもそのはず、金木犀の香り成分は熱に弱く、蒸留では香りが飛びやすいため、実用的

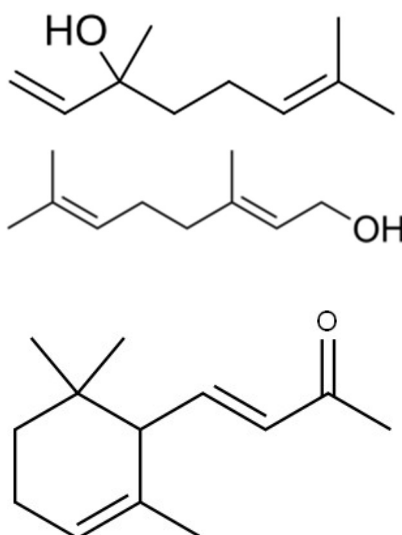
ではなかったのです。今だったら、ホホバオイルやグレープシードオイルなどといった無臭の油脂による「油脂吸着法」か、無水アルコールを使った「アルコール抽出法」を勧めるところですが、当時はそこまで考えが及びませんでした。

ところで、中国では金木犀は「桂花（グイホア）」と呼ばれ、古来より吉祥の象徴とされてきました。中秋節には桂花酒を酌み交わし、月を愛でる風習があったそうです。桂花は月に咲く花とされ、伝説では月に住む仙人・呉剛が桂の木を切り続けているといわれています。日本でも「桂男」という妖怪が月に住むとされるなど、月と桂の結びつきは東アジア文化に共通するモチーフとなっているようです。

一方、日本では金木犀は「トイレの芳香剤の香り」として記憶されることも多いようで、子どもたちに匂いの感想を尋ねると「トイレの匂い」と答える子どもも多いのだとか（私も瞬間そう思った）。それは、昭和期に普及した芳香剤の主成分に金木犀の香りが使われたため、懐かしさと生活感が入り混じった印象を持つ人も少なくないためでしょう。しかし、裏を返せば金木犀が庶民の生活に深く浸透していた証でもあります。香りは記憶と密接に結びつき、金木犀の香りを嗅ぐと、幼少期の秋の通学路や祖父母の家の庭先を思い出すという声も多いのではないのでしょうか。

また、金木犀は雌雄異株で、日本に植えられているのはほとんどが雄株だそうです。これは、雌株が実をつけると掃除が大変になるため、園芸的に雄株が好まれた結果です。したがって、日本では金木犀の実を見ることはほとんどありません。これは植物学的にも興味深い現象で、文化的選択が生態系に影響を与えた一例ともいえます。

近年では、金木犀の香りを活かしたクラフトジンやフレーバーティー、焼き菓子なども登場し、再評価の機運が高まっています。香りを抽出する技術の進歩により、より繊細で自然な香りが商品化されるようになったためと思われます。金木犀の香りは、季節の移ろいを告げるだけでなく、人々の記憶を呼び起こし、文化の深層に触れる鍵となっているようです。その香りに包まれながら、私たちは過去と現在、そして未来をつなぐ感性の糸を手繰り寄せ、秋の短いひととき、金木犀の香りに寄り添ってみてはいかがでしょうか。



抽出してみたいという生徒がいて、彼女はラベンダーの精油を抽出するのに一般的な水蒸気蒸留法で挑戦していましたが、何度試してもうまくいきませんでした。それもそのはず、金木犀の香り成分は熱に弱く、蒸留では香りが飛びやすいため、実用的